

あおぞらだより

第159号(発行/平成28年8月)

納涼祭

二人三脚

江戸川病院院長 新村ヨシオ



あさがお/内科

二人三脚は二人で協力しあって事にあたることを言う。ふたりでお互いを尊重しないと成果を上げることはできない。二人三脚は結婚式の祝辞で、かなりの頻度で引用される言葉である。昔から運動会で定番の競技で、二人の足首を縛って足並みを揃えて走って順位を競う種目から、絆の結束を例えられてきた。二人のリズムがあうんの呼吸で伝わらないと倒れてゴールに達しない。たった二人で組んでもなかなか走れないものである。協力しあうのであるが、どちらかが主導しないと

お互いに遠慮して協同作業ができない。まず肩をどのように組むのか、かけ声はどちらが出すのか、歩幅はどれ位にするのか、どちらの足から踏み出すのか、などお互いに確認しないと転倒する。約束してもそれぞれに感性が異なるので共通のリズムは「いちにいちに」となった。それでもどちらかが気が急くと歩調が合わなくなる。本当に言うは易く行うは難しである。こんな簡単なことでも出来ないのだから、二人三脚を実践するには呼吸が合った同士でないとできない。

二人三脚と言うが、夫婦においても生育歴や性差も異なり、興味や関心そして趣味も違うし、リズム感や間合いのとり方は個人の感性によって決められることも多い。その二人が協力し、歩調を合わせる事はひととりの協調性がないと達成はできないであろう。個性が同じ人は居ないので、やはり譲歩・遠慮・妥協がないと二人三脚は成り立た

ない。主張ばかりすれば、両雄並び立たずと言われるようにいずれは対立することになり、一方は倒れてしまうものである。夫婦であっても経済観念、道徳観念や人情の機微にしても一致することは少ないと思う。子どもを育てるのに男性性・女性性をどのように仕付けていくか、教育にしても子どもが成人するまで課題として継続するのである。夫婦の二人三脚でも、子どものことになるとどちらかが主導権を握るかで対立が起こると思われる。憎しみや恨みが続くと共通点や妥協点が見つからなければ決裂となり、二人三脚は解消となる。

二人三脚が可能なのは一時的な目標に向かって求心力を一本化する時である。大きな集団や会社などではよくあることである。会長と副会長、社長と副社長、主将や副将などが組織や会社やチームを牽引し、同じ目標を達成するために、部下を鼓舞するのである。共感する人は自身の能力が続く限り献身的に協力していく。その人数が多ければ多い程、大きな力になっていく。力が結集されなければ大願は成就できない。成功が得られると手柄の評価になって、どちらかを立役者にしようと周囲の動きが活発になると派閥が出来てくる。人間の心理は複数の人が集合すれば仲間づくりが始まり、いくつもの集団ができるものである。その集団はどちらかを祭り上げて頂点に立たせ、恩恵に浴して出世しようとする輩もいるので対立してくる。当初の目的が達成すると二人三脚は消滅していく。

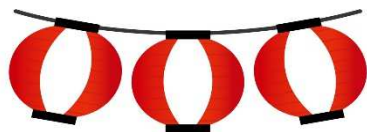
二人三脚の本当のところは、夫婦のためにあるのではないが。社会通念の理解でさえ、若い時はつい競い合って引っ込みがつかなくて、対立することもあったはずだが、いつしか折り合いがついて共通の価値観が育まれる。母親は女性性は理解できても男性性を教育するのはとても難しいかと思われるが、子どもの友人付き合いや進路そして職業選択などの推移を観察しながら忠告しているものだ。父親の出番は少なくとも母親の機転で日常は送れるが、節目での関与は真剣に対応していくことで両親の一貫性を理解し成人していく。自身は子どもを独立させ、安堵しているうちに老夫婦のみになってしまった。核家族となった今こそ老夫婦は二人三脚で生活しなくてはならぬ。更に前期高齢者となると知力と体力が年毎に衰退し、二人で一人前になってくる。力仕事は夫となっても、二人で持ち上げないと持てなくなる。日常の日程も共通の予定表に記入し、お互いに忘れないように注意を喚起する必要がある。来年自身は70歳になるが、家内と二人三脚で生活しようと再確認したところである。年を重ねるにつれ二人三脚で共同生活することになっている。どちらかが倒れたら大変なので、健康にも留意している。



職員や患者様に「右！左！」と誘導されて、「せーの」の掛け声で豪快に叩きました。
紙製のスイカは患者様作成です。

納涼祭

平成28年7月27日



スイカ割り、スイカの重さ当てクイズの後は、みんなでスイカとフルーツポンチを食べました。
みなさん「おいしい」「今年初めて食べるのでうれしい」「もっと食べたい」とスイカを頬張っていました。



今年はスイカを使ったフルーツポンチも登場しました。

